

注意

字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

次の1、2の問いに答えなさい。

- 1 次の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。
また、――線をつけたカタカナの部分で、漢字に直して書きなさい。
- | | |
|--|---|
| (1) 気持ち <small>が</small> 紛 <small>れ</small> る。 | (5) 地元 <small>の</small> 企業 <small>に</small> ツ <small>ツ</small> トめる。 |
| (2) 諭 <small>す</small> ように話す。 | (6) 砂糖で甘み <small>が</small> マ <small>ス</small> 。 |
| (3) 余暇 <small>を</small> 楽しむ。 | (7) 冷暖房をカンビ <small>し</small> ている。 |
| (4) 悠然とたたずむ。 | (8) 制度のカイカクを進める。 |

2 次の文中の――線をつけた動詞の中で、活用形が他と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

ア 確認したとおり、私たちは「考え」なければ、習慣的な自分から抜け出ることができません。逆イに言えば、「考える」とは習慣的な自分からの逸脱を、つまり他人になることを意味します。本を読むことで他人の「考え」を体験し、ノートを使いながらその「考え」に自分の思考をぶエつけていけば、私たちは「自分」でない自分へと変身していけるようになります。オ

（倉下 忠憲「すべてはノートからはじまる あなたの人生をひらく記録術」より）

次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

- A 鷹なの巢うや大虚ちやうに澄める日一つ
橋本 鶏二けいじ
- B 彼一語我一語秋深みかも
高浜 虚子きよこ
- C 撥ね飛ばす一枚恋の歌がるた
加古 宗也そうや
- D 秋や今朝一足ひとあしに知るしるののごひえん
松江 重頼しげより
- E 不二ふじひとつ埋みうずのこして若葉かな
与謝 蕪村ふせん
- F 春ひとり槍投やりげて槍に歩み寄る
能村 登四郎のむら としろう

注1 大空。
注2 よくふいて表面が滑らかになっている縁側。
注3 富士山。

- 1 情景を順に追うような言い方を用いて、ゆつくりとした動きで黙々と競技の練習をする様子を詠んだ俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。
- 2 上空から見下ろすような大きな視野の先に雄大な存在を描き出すとともに、盛んな生命の勢いを切れ字を用いて表現している俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

3 次の文章は、A～Fの中のある俳句の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

この句では、季節の移ろいを、相手との対話の中に感じている様子が表現されている。互いに交わす言葉を「Ⅰ」と表現しているように、この対話は活発なものではなく、Ⅱが感じられる。またこの句は、そのような対話を描き出すことを通して、Ⅲとともに季節の深まりが読み手に伝わってくる句である。

- (1) Ⅰにあてはまる最も適当な言葉を、その俳句の中から二字でそのまま書き抜きなさい。
- (2) Ⅱ、Ⅲにあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。
- | | |
|-----------------|--------|
| ア Ⅱ 口調を強めていく様子 | Ⅲ 悲しさ |
| イ Ⅱ かすかにささやく様子 | Ⅲ 爽やかさ |
| ウ Ⅱ じつくりと語り合う様子 | Ⅲ 楽しさ |
| エ Ⅱ 激しく議論する様子 | Ⅲ 穏やかさ |
| オ Ⅱ ぼつりぼつりと話す様子 | Ⅲ 静けさ |

三 次の文章Ⅰ、文章Ⅱを読んで、あとの問いに答えなさい。

文章Ⅰ

昔さる人の云へるは、人間万事師匠といふ物なくて（ある人が言ったことには）
叶はぬ事なり。さりながら根本の師匠をたづねもとむべし。（何につけても）
根本の師匠とはわが心なり。物をならはんと思ふが則ち（しかしながら真の）
師匠なり。さあれば我が心こそ師匠なれ。されば世間に（物を買おうと思う心が）
師匠をする人は物毎に多けれども、ならひまなばんと（そうすると）
思ふ心ざしなれば、その師匠もあり甲斐なし。縦がひ又世間に、其のしなじなの師匠はまれなりとも、（存在する意味がない）
わが心をただしくして、もの毎に油断なく、（なかなか見つからないとしても）
吟味せんさくをしたしなみ候はば、その心（念入りに細かいところまで調べて）
すなはち師匠となりて、日々にあらたなるべし。（進歩をもたらす）

文章Ⅱ

蓋し須らく切磋して相起あひおこすべきこと明らかなり。（思うに）
門を閉ぢて読書し、心を師とし自ら是とするも、（思うに）
稠人広坐すれば、謬誤して羞慙しやうそんする者有るを見ること多し。（大勢の人前に出て）
（間違いを犯して恥をかく）

（顔氏家訓」より）

1 「ならはん」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

2 次の会話は、文章Ⅰ、文章Ⅱについて、授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

- Aさん 「文章Ⅰ、文章Ⅱのどちらも、学ぶ姿勢について述べた文章だよ。どちらにも『心』と『師』という語が書かれているよ。二つとも似たような内容を述べているのかな。」
- Bさん 「内容を確かめよう。まず文章Ⅰは、学ぶときの師匠とは『①』そのものだという内容だよ。」
- Cさん 「でも、文章Ⅱは、心を師とすると間違いを犯す結果になるという内容のようだよ。どうやら、二つの文章は互いに考え方が異なるようだね。」
- Aさん 「そうだね。文章Ⅱは『須らく切磋して相起こすべき』と述べているよ。この部分を踏まえて考えると、文章Ⅱの『心を師とし自らは是とする』は、②という、学ぶときに避けるべき姿勢を述べている表現なのだと思うよ。」
- Bさん 「では、文章Ⅰと文章Ⅱは、どちらが正しい見方なのかな。」
- Cさん 「二つの文章の意見はそれぞれ視点が異なっていると思うよ。むしろ、文章Ⅰと文章Ⅱ、両方の内容を総合して、学ぶために大事な考え方として『③』という意見としてまとめられるのではないかな。」

- (1) ①にあてはまる最も適当な言葉を、文章Ⅰ（文語文）から十三字でそのまま書き抜きなさい。
- (2) ②にあてはまる内容を、二十字以内で書きなさい。
- (3) ③にあてはまる文章として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。
- ア 学ぶ仲間と常に議論して知識を深め合おうとしながらも、自身の学びの成果を信じる確かな信念を抱き続けるべきである。
- イ 学びたいという確かな意欲を胸に抱きながら、自分よりもさらに優れた才能のある仲間を探そうとする姿勢をもつべきである。
- ウ 学ぶことの自主性を重んじて互いの学び方に口は出さないが、仲間の意見を参考にした上でお互いに学びを進めるべきである。
- エ 学ぶことに対する意欲を自分自身の中で明確にした上で、共に学ぶ仲間を探して知識を深め合うという方法をとるべきである。
- オ 学ぶ上で心から信頼できる師匠につく学び方を選ぶ一方、師匠に寄りかからず自分自身で学ぼうとする意志をもつべきである。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（中学一年生の立岡麻由子は、生徒から「サヒメ」と呼ばれる宮永沙姫先生が顧問を受け持つ吹奏楽部に所属している。三年生の杉崎里美は、麻由子と同じ楽器を担当し、初心者だった麻由子を気にかけてくれていた。十月の中旬に行われた定期演奏会（定演）の一週間後、三年生とのお別れ会が開かれ、先輩たちがそれぞれの進路について話した。）

里美は、遠くはなれた高校の看護科に進むのだという。
「えっ？　なんで？」
麻由子は、思った。

「静流市の高校に通ってくればときどき会いにいけるし、地区大会でだって会える……」

麻由子は、遠い町に進学を決めた里美をうらめしく思った。
「ふつうの高校に行くより、そのほうが早く看護師になれるの。うちは農家で、父さんも母さんも日の出前から働いて苦労してるから、早く看護師になって少しでも楽をさせてあげたい。」

淡々と語る里美に、ひときわ大きな拍手が送られた。

みんなの思いを託した、小さな花束が三年生にわたされる。

麻由子は、複雑な気持ちで里美に花束をわたした。

（本当に、もう会えないの……？）

お別れ会のあと、ほかの先輩は帰ったのに里美だけは残って片づけを手伝った。最後まで、里美は里美だった。

（このままずっと、いてほしい……）

麻由子は、里美がいなくなることをどうしても受け入れることができなかった。

見送られて、里美が学校を出る。

帰り道が同じ何人かが、まとわりつくようにしていつしよに歩く。

麻由子も、そのなかにまじっていた。

みんなはそれぞれ途中で別れていったが、麻由子だけはいつまでもくずくずと残っていた。

「麻由、家、反対の方向じゃない？　大丈夫？」

里美が心配するが、麻由子はどうしてもさよならをいうことができない。

「もう少し、もう少しし。」

といつているうちに、人家はどんどん少なくなっていく。

里美の家は、町から遠くはなれている。

この距離を、毎日ひとり通ってきたのだ。

しかも、麻由子が朝練に行くとき里美は必ずそこにいた。

定演で、町のホールに響いたソロ……。

麻由子は、あらためて思う。

里美は、ただ練習をしていたのではない。人一倍の努力で、けんめいに音を磨きあげていったのだ。

同じことを、自分ではできるだろうか。

（できない……）
麻由子は、里美のぬけたあとの練習を思うと気が重くなった。

ガードレールで仕切られた、川沿いの道を歩く。

短縮授業だったから、暗くなるにはまだ少し時間がある。

もうかなり歩いたはずなのに、道の先にはなにも見えない。

そろそろ、帰ろうか？　とも思ったが、でも、ここまできて引き返すわけにはいかなかった。

（こうなったら、家まで送っていいこう。）

麻由子は、いつのまにかそう決めていた。

右頬に受ける川風が、気持ちいい。

反対側の山はすでに暑苦しい紅葉の衣をぬぎ、黄色味と茶色ばかりが目立つようになっていた。苦しい夏がすぎ冬に向かうこの季節、ちよっぴり呼吸が楽になる。

麻由子は、思いきって里美にきいてみた。

「先輩。」

「ん？」

「里美先輩は、サヒメ語がわかるんですか？」

「えっ？　サヒメ語？」

なにそれ？　というように里美がこつちを見た。

「だって、サヒメって独特の言葉使うでしょ。いきなり『手をつないでっ』とかいわれたって。私ほんとにつなぐのかと思ってクラリネットはなしたら、みんな知らん顔して続けてるし……」

「えっ？」

里美は、はじけるように笑った。

なにがおかしかったのか、涙を流して笑ってる。

「麻由子って、おもしろいよね。」

とか、

「ほんと、素直だわ。」

とか、いいながら、里美はなかなか笑うのをやめなかった。

なぜそんなに笑うのかわからなかったが、最後に里美がこんなに笑ってくれて麻由子はなんだかうれしかった。

ハンカチで涙を拭きながら、里美がいった。

「そんな真面目に考えてるの、麻由だけだよ。」

えっ？　と、思った。

「サヒメの言葉なんてね、わかっててもわからなくてもいいの。」

どういうこと？

「わかるときは、わかるし。わからないときは、わからない。それで、いいの。」

意外だった。里美の口から、そんないいかげんな答えが出てくるなんて。

「だって……」

麻由子は、頬をふくらませた。

3「無理に、わからうとしなくていいんじゃない？」

里美が、やさしく麻由子のをぞきこむ。

その目に、まだ涙がたまってる。

「麻由にも、そのうちさつとわかるるときがくるよ。サヒメ語？　サヒメ語は……、

（へっ？）

わかったような、わからないような。

サヒメ語、みたい。

まさか、サヒメ化……？

三年たつと似てくるのかと思っていると、右側の橋からひとりの男の子が転がるように飛びだしてきた。

小学校三、四年生だろうか。

男の子は、麻由子をちらりと見て恥ずかしそうに里美のかげにかくれた。

「姉ちゃん、腹減った。今日のめし、なに？」

里美の手をとりながら、小さな声でいつている。

いたら、橋の奥に農家らしい民家があった。どうやら、里美の家の前にきてこつちを見ている。

妹？

麻由子は、はじかれたように里美のそばをはなれた。

「姉ちゃん、今日のめし、なに？……」

里美は部活を終え、帰ってから毎日夜飯をつくっていたのだ。

「それじゃあ、これで。」

麻由子が手をあげると、

「うん。」

耳の横で結んだ髪をゆらして、里美も手をふった。

あつけない、別れだった。

ふり返ると、弟といっしょに里美が家に向かって歩いていく。

その向こうに、広い畑が見える。

遠くに、いそがしそうに働くふたつの影。

お父さんと、お母さんだろうか。

ふたりのまわりで、赤い小さな火がちろちろと燃えている。

収穫を終えた畑で、なにかを燃やしているのだ。

野焼き？

初めて、見た。

農家には、まだ認められているんだ……。

野焼きの煙にかすんで、遠くの山が薄青いシルエットをつくっていた。

川風を左頬に受け、きた道をもどる。

里美と歩いたときはそう感じなかった道が、ひとりの足では途方もなく遠かった。

「父さんも母さんも日の出前から働いてるから、早く看護師になって楽をさせたい。」

そのために家をはなれ、看護科のある高校へ進む。

「サヒメ語」なんて、まぬけな質問をした自分が恥ずかしかった。

（有島 希音「オリオンの上」より）

注1 演奏を一人で行うこと。

注2 田畑の稲わらや草などを焼くこと。

注3 後方から光が当たって浮かび上がった風景や人物の輪郭。

1 「複雑な気持ち」とあるが、どのような気持ちか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 拍手を送って発表を聞いた喜びを里美に届けるみんなの気持ちも分

かる一方、自分は進んで拍手を送ることができないという気持ち。

イ 進路に対する決意を聞いて里美を応援するみんなの気持ちも分かる

一方、自分は素直に里美を応援することができないという気持ち。

ウ 里美の進路の話を聞いて決意の強さに驚くみんなの気持ちも分かる

一方、自分だけは里美の話を信用することができないという気持ち。

エ 里美の淡々とした話しぶりに引き込まれるみんなの気持ちも分かる

一方、自分は心から里美の話を楽しむことができないという気持ち。

オ 里美の進路の話を聞いて心配になるみんなの気持ちも分かる一方、

自分は本心から里美の進路を心配することができないという気持ち。

2 「意外だった。」とあるが、麻由子が意外だと思ったのはなぜか。三十五字以内で書きなさい。

3 「里美が、やさしく麻由子のをぞきこむ。」とあるが、このときの里美の心情の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア サヒメ語について真面目に考える麻由子の言葉をおもしろがりながらも、むくれている素直さをいとおしく感じている。

イ サヒメの言葉どおりに動いてみようとした麻由子を頼もしく感じる一方、部活動を引退するさみしさをかみしめている。

ウ 自分が抜けたあとも麻由子が集中して練習に取り組めるように、サヒメ語について明快に説明しようと思気込んでいる。

エ サヒメの言葉を理解しようとしても無駄なのに、何としても理解しようと思問してくる麻由子のことをあわれんでいる。

オ 一生懸命な後輩と一緒にいたからこそ厳しい練習にも耐えられたのだと感激し、目の前の麻由子に心から感謝している。

4 「自分が恥ずかしかった。」とあるが、この場面に至るまでの麻由子の心情の変化について次のように説明したい。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

麻由子ははじめ、「遠くはなれた高校の看護科に進む」という里美の言葉を聞いて、里美を Ⅰ 思った。里美がいなくなることを認めたくない麻由子は、里美と一緒に帰る途中で引き返すことができず、家まで送っていいこうと心に決める。しかし、家の前まで来て、姉の帰りを待っていた弟や妹、そしてまだ畑で働いているらしい両親など、里美の家族の様子を知ったとき、自分は Ⅱ と気づき、まぬけな質問をしたことを恥ずかしく思った。

(1) Ⅰ にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から五字でそのまますき抜きなさい。

(2) Ⅱ にあてはまる、麻由子が気づいた内容を、五十字以内で書きなさい。

5 本文中の表現について説明した文として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 行きは右頬に「川風」を受けていたのが帰りに左頬に変わる描写は、麻由子が自分の気持ちをきつぱりと切り替えたことを表している。

イ 山の様子を隠喻で表した「暑苦しい紅葉の衣」という描写は、よく晴れていて気温が高く汗ばむような暑さであることを示している。

ウ 里美を家に送る秋景色の中で「ちよっぴり呼吸が楽になる」という描写は、里美と並んで歩く麻由子のあふれる幸福感を伝えている。

エ 遠くの山の「薄青いシルエット」という描写は、里美を慕ってまとわりつく弟や妹のことをねたんでいる麻由子の心情を描いている。

オ 麻由子がひとりでもどる道を「途方もなく遠かった」と感じる描写は、里美がいなくなったあとの麻由子の心細さと重ねられている。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたしたちが見たり聞いたりしたものを言葉で表そうとして、うまくいかないという経験は多くの方がもっておられるのではないでしょう。たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はれぱれとした」とか「うきうきした」といったことばで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情や、お茶の味を十分に言い表すことができるでしょうか。たとえば「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで口あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできます。しかしその「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようとする、言葉に窮することになります。

（第一段落）

言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験の具体的な内容ある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喩えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めるとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。そのあいだには無限な距離があると言ってもよいでしょう。

（第二段落）

「言葉」の語源は、「言の端^は」であつたと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました（言葉には、そのなかで言われているものを具体化する霊的な力が宿っているという、いわゆる言霊思想はそこから生まれたものでした）。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事Ⅱ言」として事柄全体を言い表したのではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎないということが意識されるようになったのです。そのために「言の端」という言い方がされるようになったのだと考えられています。

（第三段落）

言葉がそのまま経験であるとは言えないのは、それがわたしたちの具体的な経験を普遍的な概念によってひとくくりにしてしまうことと関わっています。たとえば桔梗^{注1}の青、露草^{注2}の青、都忘れ^{注3}の青、それぞれの青は独特の色合いをもっていますが、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ「青」ということばで表現してしまします。そのことによって、個々のものももっていた微妙な差異は一挙に背後に退いてしまいます。

（第四段落）

言葉は、それぞれ独自のニュアンスをもっていたものを、既成の枠組み^{注4}、言わば鋳型のなかに押し込んでいくという役割を果たしていると言ってもよいかもしれません。わたしたちがそのときどきに抱く感情も、決して一つのことばで表現できるような単純なものではなく、さまざまな相^{注5}がそこには絡まりあっています。また固定したものではなく、大きな振幅をもちながら、止むことなく動いていきます。言葉はその動きの振幅を削りとって、それをたとえば「悲しい」とか「寂しい」といった一つのことばで表現するわけですが、そのことによって感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れてしまうのではないでしょう。

（第五段落）

言葉によってわたしたちは多くのことを知り、多くのことを考えるわけですが、そこには制約もまたあるように思います。枠組みのなかに入らないものはとらえることができないわけですし、その枠組みに取り込まれたものは、その枠組みにあうように変形させられてしまします。これは、言葉にどこまでもつきまとう根本的な制約であると言ってもよいでしょう。それだけでなく、言葉は、この枠組みでとらえられたものが、もの自体であり、ものごとはそれによって正確にとらえられているという意識を、それを使う人のなかに生みだします。言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗り越えることができるのではないのでしょうか。

（第六段落）

言葉にはまず、ものをグループ分けする働き、つまりカテゴリー化する働きがあります。そこでは、いま目の前にしているリング、たとえば紅玉^{注6}の独特の赤い色とか、それ特有の甘酸っぱい味、あるいはそれが私の好みであるとかいったことは問題にされません。むしろリングに共通の性質ですべてのものをひとくくりにすることがその場合の唯一の関心事です。しかし、たとえば友人に「紅玉はおいしいよね」と語ったとき、この「紅玉」ということは、その基礎的な意味を相手に伝えるだけでなく、相手がその味を知っている場合には、その人のなかに、紅玉独特の強い酸味のきいた甘さがありありとイメージさせることができます。それを言葉の喚起機能と呼んでよいと思いますが、わたしたちは「紅玉」ということばを聞いたとき、その音声越しに基礎的な意味を聞くだけでなく、さらにその意味を越えて、このことばがもつ豊かな意味あいをも聞くことができるのです。ここに鍵がありそうです。

（第七段落）

たしかに、わたしたちはいくらことばを重ねても、紅玉の微妙な味をことばで表現し尽くすことはできません。そこに言葉の限界があります。しかし他方、いま言った機能によって、その味を直接相手のなかに喚起することができます。そのような働きがあるからこそ、わたしたちの会話は、平板な意味のやりとり¹に終始せず、いきいきとしたものになるのだと言えるのではないのでしょうか。

（第八段落）

（藤田 正勝「はじめての哲学」より）

1 次のア～オは、本文で用いられている熟語である。熟語の構成が他と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

ア 両者 イ 語源 ウ 思想 エ 一端 オ 他方

2 「言葉」の語源は、「言の端」であつた」とあるが、「言の端」という表現は、言葉のどのような特徴を表しているか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア ある事柄を表現する言葉は、事柄の一部分のみを切り取って全体を表すことができるという特徴。
イ ある言葉で表現された事柄は、全体像が切り取られて偽りの形でしか伝わらなくなるという特徴。
ウ ある一つの言葉は、対応する一つの事柄とだけ通じて他の事柄を表すことができないという特徴。
エ ある事柄を表している言葉は、事柄の全てではなく限られた一部分のみを表しているという特徴。
オ ある言葉の語源となった事柄は、言葉が表している意味の一部分にだけ影響しているという特徴。

3 次の会話は、²「枠組み」について、授業で話し合ったときの内容の一部である。会話を読み、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

Aさん 「既成の枠組みに押し込めるとは、つまりどういうことなのだろうね。」
Bさん 「たとえば、犬の毛がクリーム色でもチョコレート色でも、茶色の犬という枠組みで表すことがあるということではないかな。」
Cさん 「なるほど。様々な犬がいるけれど、特定の枠組みに入れたことで、実際とは違う様子として表現されることもあるという考え方だね。本文から考えるとこういう枠組みの中での変化は、言葉で表現する以上は避けられないことのようなだね。」
E 「それで、枠組みに取り込むことが言葉と経験の間に隔たりを生む結果になると言えるのだと思うよ。」
オ 「それに、枠組みにまとめることで、意識的に物事を正確にとらえることができるのではないのかな。」
Aさん 「もう一度本文を読んで、筆者の意見を確かめてみよう。」

(1) 会話文の中の――線をつけた部分が、本文から読み取れる内容と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

(2) Aさんは、話し合いのあと、本文の内容について次のようにノートにまとめた。

に

あてはまる最も適当な言葉を、**第一段落**～**第四段落**の中から**十六字**でそのまま書き抜きなさい。

○ 枠組みに押し込めることの作用とは
(例)「悲しい」ということば
実際には様々な相を持つ悲しさも、「悲しい」ということばで表されるとき、

は

は無視される。
独自のニュアンスをもっていたものが枠組みに押し込まれることで、感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れる。

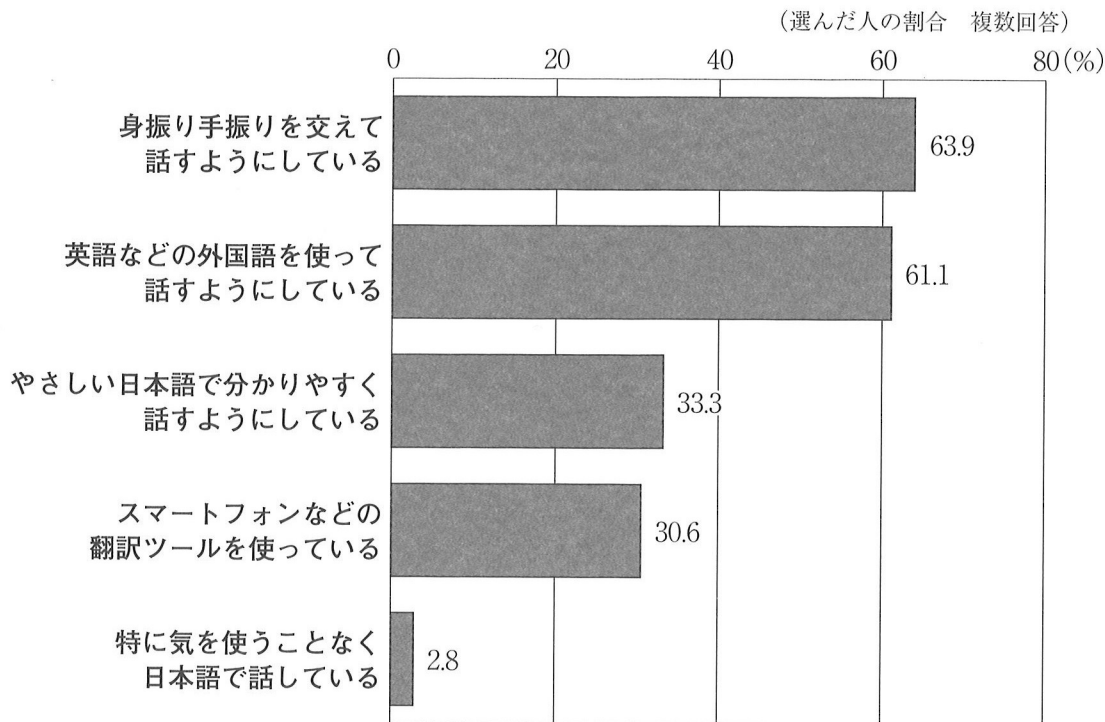
4 本文における**第六段落**の働きとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。
ア 言葉の制約について整理して問題提起の形で示し、第七段落以降で言葉の発展的な特徴を述べるための導入とする働き。
イ 言葉の不合理な特徴を複数の具体例の形で示し、第七段落以降で言葉の持つ働きを否定するための導入とする働き。
ウ 言葉の定義に関する意見を抽象化した表現で示し、第七段落以降で言葉の持つ欠点を述べるための導入とする働き。
エ 言葉の意味は使い方で変化することを示し、第七段落以降で言葉の正確な使い方を説明するための導入とする働き。
オ 言葉の働きに関する本文の内容を整理して示し、第七段落以降で言葉の持つ機能をまとめていくための導入とする働き。

5 「わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになる」とあるが、会話を「平板な意味のやりとり」にする言葉の限界と、その限界を乗り越える会話を「いきいきとしたもの」にする言葉の働きとはどのようなことか。七十文字以内で書きなさい。

六

次の資料は、ある調査で外国人と接する機会があると答えた全国の十六〜十九歳の男女に、外国人とどのようにコミュニケーションを取っているかを尋ねた結果の一部をグラフで表したものである。この資料を見て気づいたことと、「外国人とのコミュニケーションの取り方」についてあなたの考えや意見を、あとの条件に従って書きなさい。

外国人とどのように意思の疎通を図っているか



(文化庁「国語に関する世論調査 (令和元年度)」により作成)

条件

- 1 二段落構成とすること。
- 2 前段では、資料を見て気づいたことを書くこと。
- 3 後段では、前段を踏まえて、「外国人とのコミュニケーションの取り方」についてのあなたの考えや意見を書くこと。
- 4 全体を百五十字以上、二百字以内でまとめること。
- 5 氏名は書かないで、本文から書き始めること。
- 6 原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。

四					三					二				一										大	問
5	4		3	2	1	2			1	3		2	1	2	1								小	題	
オ	(2)	(1)	ア	部活動に対して常に真剣だった里美が、いいかげんな答えを言ったから。	イ	(3)	(2)	(1)	ならわん	(2)	(1)	E	F	イ	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	正 解		
	里美が家族のために遠くはなれた高校に進学すると決めた事情を知らずに、自分勝手な考え方をしていた	うらめしく				エ	自分一人で学んだことを正しいと思ひ込む	ならひまなばんと思ふ心ざし		オ	一語				改革	完備	増(す)	勤(める)	ゆうぜん	よか	さと(す)	まぎ(れる)			
2	4	1	2	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	標 準 配 点		
	同様の趣旨であればよい。			同様の趣旨であればよい。			同様の趣旨であればよい。								とめ、はねにはこだわらず、字体・字形が損なわれていなければよい。								備 考		

六	五						大	問
	5	4	3		2	1	小	題
	与えられた条件のもとで、述べられていること。	ア	(2)	(1)	エ	ウ	正 解	
6			個々のものがもっていた微妙な差異	オ				
							配 点	標 準
							備 考	

※部分点については、各校において統一した基準を設けて採点するものとする。